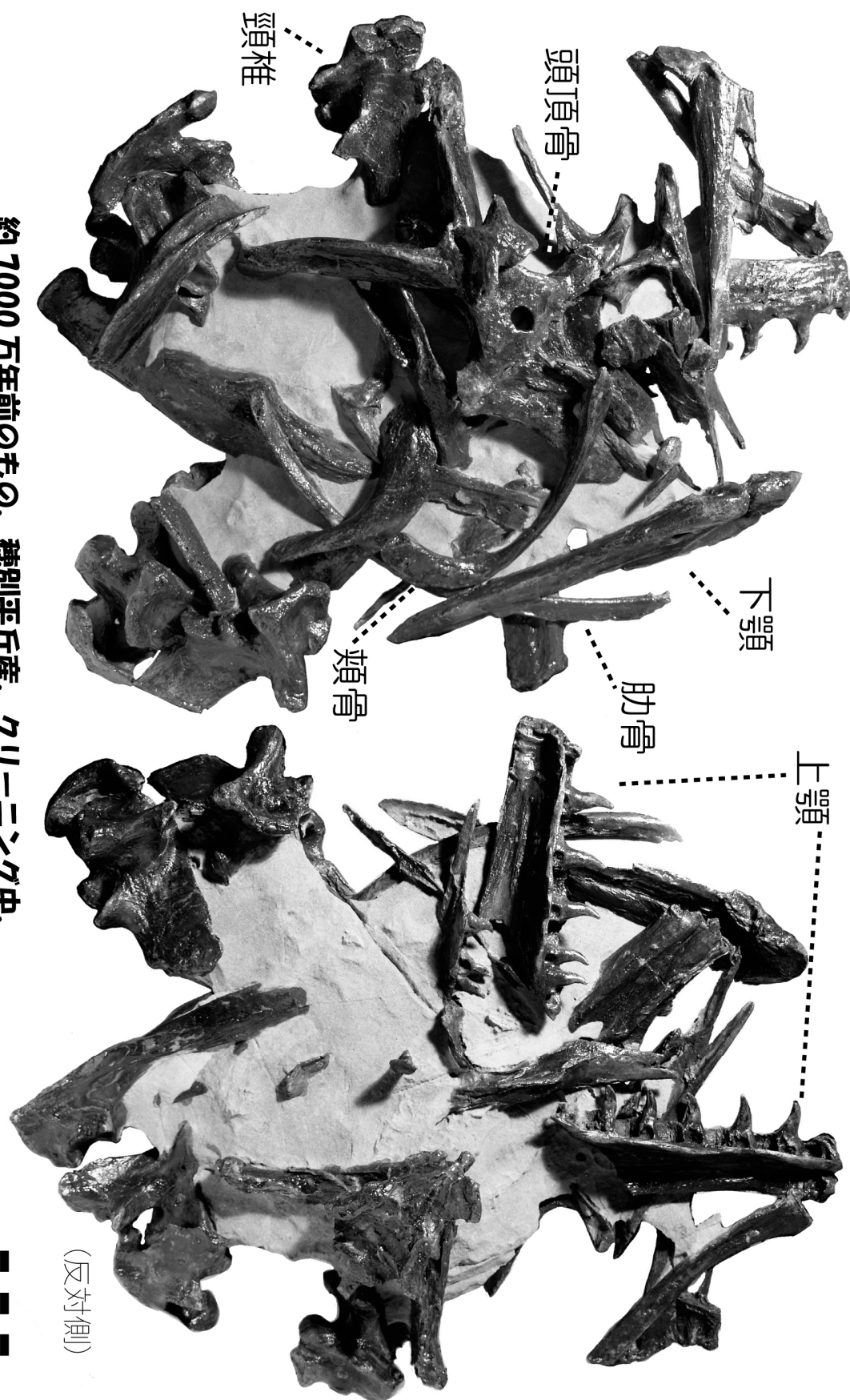




白亜紀海棲爬虫類

モササウルス類の頭骨発見



約7000万年前のもの。穂別平丘産。クリーニング中。

5 cm

(反対側)

(おもての説明) 西村が昨年採集し、正体不明だった脊椎動物化石(ホッピーだよりNo. 300を参照。以前のホッピーだよりは博物館ホームページで見られます。)が白亜紀海棲爬虫類モササウルス類の頭骨であることが分かってきました。

昨年の11月から下山学芸補助員が「酸処理」によるクリーニングを行い、ようやく写真の様な全体像が見えてきました。精密なクリーニングの結果、この標本がモササウルス類の頭骨及び数個の椎骨からなることが分かってきました。

この標本は主に頭部周辺を構成する骨要素が分離しています。標本は頭頂部、上・下顎、頸椎などからなります。化石の保存状態が非常に良く、頭骨の半分以上にあたる部分が保存されていることから、日本国内でも有数の標本です。

共同研究者でモササウルス類化石を専門とする小西卓哉博士(カナダ王立ティレル博物館)によると、このモササウルス標本は世界でも発見数が極めて少ない珍しいグループに属すると考えられ、またこの同定が正しかった場合、日本も含めた西太平洋沿岸地域におけるこのグループの初めての発見例となることなどからも、新種である可能性は高いとのこと。また、このグループの生息地域を大きく拡大する可能性が高い点においても、とても貴重な標本だとしています。

酸処理は、1回の作業で周囲の余分な岩石が1mm弱ほどしか除去されないこと、露出している化石の部分を毎回樹脂で丁寧に保護しなければならない為、クリーニングに長大な時間がかかります。クリーニング終了までには、あと1年ほどかかる見通しですが、数年以内には常設展示に加えられる予定です。

順調に研究が進めば、この標本は数年以内に学術論文に記載されます。その時点でこの標本の学術的価値や新種であるかどうかなどといった情報が正式に学問の世界へ発信されたとみなされます。

(普及員 西村・学芸員 桜井)



ティロサウルス(モササウルス類)
復元模型

モササウルス類 (爬虫綱 有鱗目 モササウルス科)

白亜紀後期の約9800万年前から6500万年前に生息していた大型の海棲爬虫類。ヘビやトカゲと同じ有鱗目に含まれる。ヨーロッパ、北米、日本などから産出している。日本では三笠産のタニファサウルス・ミカサエンシス(エゾミカサリュウ)が有名である。穂別地域からは、モササウルス・ホベツエンシス、モササウルス・プリズマティクス、ティロサウルス類(種不明)などが産出している。

むかわの化石や生き物<穂別の脊椎動物化石>

Mosasaurus prismaticus

モササウルス・プリズマティクス

表面はなめらかで、後方へはあまり強く傾かない



HMG-12
モササウルス・ホベツエンシスの歯

1目盛り1cm

前方⇄後方

表面は多面体となり、後方へより強く傾く



HMG-1065
モササウルス・プリズマティクスの歯

HMG-1065。1995年に渋谷直憲(当館学芸補助員・当時)と川上源太郎(当館学芸員・当時)によって穂別地域にて発見された。分離した歯のほか、頭骨の一部が保存されていた。それらの特徴はモササウルス属であることを示している。歯の両面が明瞭な多面体(プリズム状)となるのがこの種の特徴である。1999年発行の当館研究報告にて、桜井・地徳・渋谷によって新種として報告された。(学芸員 桜井)

2010年 1 2 月						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3 4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

■：休館日

12/6、13、20、27は通常の休館日です(月曜日)
12/24は祝日の振替です
12/31-1/5は年末年始の休館